

スリランカ -- 知られざる国技、バレーボール（特集 途上国・新興国のスポーツ）

著者	荒井 悦代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	24-25
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003186

スリランカ

知られざる国技、バレーボール

荒井悦代

スリランカで最も愛されているスポーツ、それはクリケットだ。

かつてイギリスの植民地だった国々では一般的に盛んで、スリランカも例外ではない。青いユニフォームを着たスリランカのナショナルチームのメンバーは国民にとってヒーロー的な存在だ。クリケット選手はCMにも引っ張りだこ、知名度を活かして政治家やビジネススマンに転身する選手もいる。クリケット・スリランカでグーグル検索すると三三〇万件ヒットした。約束の時間に遅れたスリランカ人のよくある言い訳のひとつが、クリケットの試合をみていて夢中になって、だ。

ではクリケットはスリランカの国技かというと、そうでない。法令によって定められた国技があり、それはバレーボールだ。しかしバレーボールへの関心はクリケットの足下にもおよばない。検索して

も一〇六万件しかヒットしなかった。注目度や人気では圧倒的にクリケットが勝っている。

バレーボールで国際的な成績があるわけでもない。クリケットではワールドカップで優勝（一九九六年）したこともあるが、バレーボールではオリンピックも世界選手権もワールドカップも出場したことはない。アジア選手権の成績も八位（男子チーム、二〇一一年）が最高だ。

●バレーの国技化

バレーボールは一九一六年にコロムボYMCAの体育担当だったR・W・カマック（RW Camack）によって導入され、コロムボの中心部ペターで、後に初代スポーツ大臣となったスガターサ（スガターサ競技場の由来となった）が率いる選手たちがお披露目を行った。

スリランカにはバレーボールによく似たアットウパンドウというゲームが古くから存在していたといわれている。お祭りの時期に農村の女性がバルコニーでボールを使つて遊ぶゲームだった。

似たようなゲームがあったからだろうか、導入からわずか六年後にはコロムボには二五のチームが活動しており、カマック自身がコロムボ市バレーボールリーグを創設している。現在のバレーボール連盟は一九五一年に、二つの前身協会を統合して発足している。

バレーボールが一九九一年に国技と認定される前はエツレイと呼ばれる野球に似た伝統的な競技が国技のように扱われていた。しかしエツレイはスリランカ以外で行うことができないことから国技として認定されなかった。では、なぜクリケットでなくバレーボールなのか。バレーボールが国技にふ

さわしいと提言したウィットラーナ（Vinnie Witharana）博士によれば、歴史的・論理的背景があったこと、道具をたくさん使うことなく、ボールとネットがあればできる、庶民のスポーツであること、ある程度の広さの平地があればできること、屋内でもできること、男性だけでなく、女性も参加できることがポイントらしい。確かにクリケットでは本格的に試合するとなるとバットやウィケットと呼ばれるマーカー、サポーターと広いグラウンドが必要である（道路や畑の隅でも投手と打者だけで遊んでいるのをみかけるが）。

●国技なのに

国技であるからには、国としても様々な後押しをしていた、ともいえない。国技として認定したものの、バレーボールをどうしたいか、という方向性はなかった。国民の理解を増し、観客数や競技人口を増やすとか、選手の技術レベルをひき上げて国際試合で勝利するなどの目標が掲げられたわけでもなかった。

日本では、小学校の時に一通り身体を動かすことをカリキュラムとして行い、各種の競技について

も基本的なルールを学び、実践を通じた授業がある。中学ともなれば課外活動としての部活動があり、将来プロになることなどを考えずに練習したり試合をしたりするものだろう。

しかし、スリランカでは違う。

スリランカの教育課程にも体育はあるものの、体育専門学校でもない限りは、体育専門の教員が十分な数を割り当てられていないことが多い。特に農村部では、体育教師だけでなく通常教科の教員すら足りないところもある。スリランカには大学が少ないため受験競争が厳しいので、体育は重視されていないのである。小さい頃から身体を動かす訓練も受けていない子どももいる。放課後の子どもたちは塾通いに忙しい。そんななかでもクリケットは人気があるので、大きな学校にはチームがあり、学校対抗戦も盛んに行われているが、バレーボールはそこまで学生を引きつける魅力はなかった。

施設面でも不利な点があった。いくらネットとボールさえあればできるとはいっても、体育館などないスリランカの学校では屋外での活動となり、暑い。ボールも行方不明になる。さらに適切な指

導者もいないとなつては競技人口の増加も望めない。学校活動以外、すなわち地域社会のクラブチームという選択肢は元からない。そうなるも競技人口の裾野を広げることはますます難しく、ナショナルチームの強化といつても絵に描いた餅だろう。

ボトムアップが無理ならトップダウン方式で、ナショナルチームのスター選手たちに脚光を浴びせて、あこがれを抱かせるという手もあつたろうが、それもなかった。

バレーボールナショナルチームでスパイカーとして二〇年（！）活躍し、コーチを務めていたカリカ・ワサンタプリア選手は嘆いている。二〇〇六年に、南アジア選手権で強豪パキスタン・チームを破った試合ではスガター・サ・スタジアムの最多入場者の記録を更新した。にもかかわらず、二〇〇八年に国民スポーツ表彰セレモニーが行われ、一五種のスポーツ選手らが招かれたが、バレーボール選手が招かれなかったことを挙げ、バレーボールや選手に適切な待遇が与えられていない、国技なのにこのようなひどい扱いを受けて、若い世代をどのようにやる気を出させたらよいのかと、嘆いた。

二〇〇五年には、バレーボールのてこ入れが必要だとウィットラーナ博士が協会に喝を入れていたはずなのだが、ベテランプレイヤーを満足させるような方策は採られていなかったようだ。

●やはり国技

しかしバレーボールの地位は近年向上している。二〇〇五年には、一九九九年以来開催されていなかった大統領杯トーナメントが復活した。復活の強力な後押しとなつたのは、携帯電話会社大手のダイアログだ。ダイアログの会長ハンス・ウィージェスリヤは、携帯電話はかつてエリートのものであったが、庶民こそが持つべきものという考えから、庶民がプレイするスポーツを支援してきた。地方予選を勝ち進んだチームが全国大会に進むものだが、出場チームは趣味でバレーボールを楽しむ人たちの集まりであり、プレイの内容や技術は緩い。それでも、選手たちは地元の名前を背負った代表としてプレイすることを誇りに思っているようだ。二〇〇五年の復活元年には四一二チームの参加だったのが、二〇一一年には六〇〇〇チームが参加する大規模大

会に発展した。ここで認められた若手らはコロンボ近郊のマハラガマの青年センターに集められ、将来のナショナルチームを背負って立つ。

二〇一〇年頃、スリランカを代表する衣類輸出企業で、従業員四万八〇〇〇人、三〇工場を有するブランドイックスが、従業員からなるチームによる工場対抗バレーボール大会を始めた。スリランカの衣類輸出工場は従業員や工場の周辺住民への配慮が手厚い。この大会も、従業員の結束や士気を高めることに貢献しているようだ。

バレーボールが選ばれたのも、国技だからという理由だ。二〇一二年から企業対抗リーグ戦も始まるなど、かつての停滞を抜け出し徐々に盛んになりつつあるようだ。

（あらい えつよ／アジア経済研究所 動向分析研究グループ）